

民間相談機関における臨床技術について

—就園前障害児の指導技術を通して—

その6 図式的投影法の適用とそれによる母親の意識変化の研究

(社)家庭生活研究会

水島 恵一 (文教大学)

宮崎 徳子・村瀬 和子

小倉 治子

序 説

前回に掲げた本研究の理論枠と方法論は、相談機関を「クライアントの全生活の投影の場」としてとらえようとする予備研究以来の仮説を明確化してゆくものである。具体的には障害幼児の相談指導において、子ども、親、治療スタッフの行動、認知の変化を、新しい「図式的投影法」の導入を含んで総合的に（かつできるだけ治療場面と生活場面对応させて）とらえることを目指してきたわけである。これに基づく本研究として、今回は子どもの変化を報告し、それに対する治療者の認知の研究として図式投影法のはしりにふれた。

今回は、①方法論としての図式的投影法のかなり全般にわたっての紹介と吟味、②それを含んだ親の認知変化の吟味を課題とする。したがって本論文は本来の二部制で構成すべきものであるが、資料が膨大になるため、図式的投影法による親の認知変化の研究にしばらく、付論1で簡単に図式投影以外の解定尺度法の結果を略述し、さらに付論2において1ケースについてのやや詳しいケース研究を独自で紹介する。

(注) 図式投影法は、一定の図式的表現を用いて操作的心理測定、構造的な人格診断、その他認知世界の理解、および心理治療的洞察過程の促進を同時に可能にすべく、水島らが発展させている方法である。それは人間、生活事象のほとんどあらゆる領域に適用可能なものとして研究され、今までに文教大学(1978~81)を中心に、感情構造、自己構造、人間関係や小集団の構造、生活構造、社会・文化構造までも含んだ研究がなされてきている。

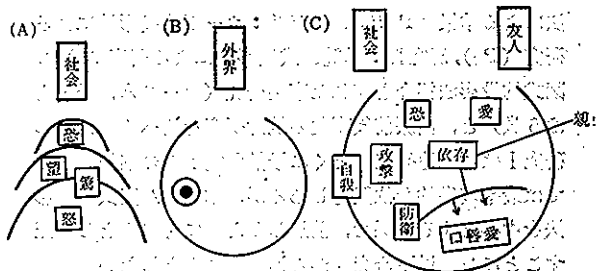
(なお水島他、教心大会1980などを参照)。とくに臨床場

面における適用は今までも多く研究され、診断、治療両面において有効性が認められつつある(水島、相談学研究1981)。

児童臨床における子ども対象の若干の方法は、前回報告で述べたが、今回は母親の認知の測定、および母親自身の自己洞察の媒介として図式投影法を用いることになる。ただすでに得られた研究結果が、極めて多いので、治療的洞察発展の面はのちの機会にゆずり、ここでは主として診断的に母親の認知をイメージ的図式的にとらえた一連の方法と結果を述べることにする。我々の考案した図式投影法は、①キーワードの単純構成による「カード式投影法」②円形駒と線なしの枠による「単純図式投影法」および、③双方の複合によって適宜工夫された場の上に構造枠と駒・カードを配列する方法の3者に分けられ、さらにこの中で各種の方法が用いられるが、それは研究2以下で具体的に例示していくことにする。

なお参考までに(本論では用いていないが)青年期以上のものが、自己の内界を投影する分がしやすい体験的図式の例として図1を参照。Aは社会に対する恐れや根

図1-1 成人の自己像図式の参考例



底の怒りをあらわし（研究Ⅱ方式のカード式投影）、Bは外界に対して自己の枠（針金使用）が開きながら核がややすみにひっこんでいる自己像の例である。Cは複合的図式の1例をあらわす。

目 的

相談所内での親子治療の過程のうち親の認知変化を図式投影法を中心にとらえることが、今回の目的である。その他の質問紙、チェックリスト等による興味もこれに関連して略述する。

方 法

対象は昭和54、55年度において、家庭生活センターおよび文教大学の各相談室で6ヶ月以上グループ指導を行った障害幼児2～5歳のうち、資料の完備したもの（表Ⅰ-1）で、全員知恵遅れ、ことばの遅れを伴っている。測定・テストの種類は、表Ⅰ-2の通りである。各テストの具体的手続きはそれぞれの項で述べることとする。（通院による変化測定のため原則として5ヶ月の期間において2回測定。以下前期、後期と呼ぶ）

表Ⅰ-1

	家庭生活センター		文教大学	
	55年	56年	55年	56年
グループ数	2	3	5	5
ケース数	5	8	25	31

表Ⅰ-2

テスト名	(方法)
P ₁ 親のニードと悩みのスケール	(治療者評定)
P ₃ 〃	(母親評定)
P ₇ 親子関係カード式図式投影	(母親図式投影)
P ₅ 親子関係単純図式	(〃)
P ₆ 家族関係集団の図式投影	(〃)

結 果

表Ⅰ-2の測定・テストの種類別に研究Ⅰ：評定尺度法による結果（P₁P₃）、研究Ⅱ：カード式投影法による研究（P₇）、研究Ⅲ：単純図式投影法による研究に分け、図式的投影法紹介を兼ねた事例研究（ケースA、子どもは5歳）と、治療前後変化の統計研究を述べる。ただし研究Ⅰは、一連研究（とくに予備研究からの継続）としては最も基礎的な位置をしめるが、本報告が図式的投影法を中心とする関係で、前述したように付論1として記すことにし、以下研究Ⅱから述べることにしたい。

なお各統計においては、家庭生活センターのものは例数の関係で55、56年度2年間のケースを一括するが、文教大相談室は年度によってかなり異っているので年度別に統計し、家庭生活センター、文教大55年度、同56年度の3群について、一貫した傾向が示されることを（個々の年度における統計的有位水準よりも）重視する。

〔研究Ⅱ〕 カード式投影法による研究

カード式投影法とは、操作的には限定されたキーワードを用いて、要素的測定、および構造の基本型を測定する目的を持つ。とくに図Ⅱ-1A、Bのような硬い枠組の教示のもとに一定の対象に対するキーワード配置を行なう方法は、SD法と同様、あらゆるイメージ測定に適した普遍的方法として発展させうる可能性がある。それは要素的測定に加えて単純化された構造や類型を測定しうる。また例えば図Ⅱ-1Cのような作品を一定の人格理論生活構造論などの枠組に従い、定義と手続きを厳密にしてカード配置を行えば、その理論に基づいた要素・構造の操作的測定となしうる。

我々の今までの研究によれば、諸々の対象に対する感情、欲求、態度語をカード化し、図Ⅱ-1のような規定作品（あるいは枠組をピラミッド式にしたカード投影）を行った結果は、SD法ないしスケール評定による結果と一般にかなり一致率が高い（要素的妥当性）。構造パターンとしては目的と方法によってとらえ方が異なるので省略するが一般にPositive-Negative バランスやアンビバレンスが表現される点などに目下我々は注目している。一方体験的、現象的イメージ投影法としては、上記操作的要素や横造関係以外のニュアンスにも注目する。とくにカードの位置やバランス、「地」のニュアンスなどにおいて体験的実感が結実する（後述自由作品参照）。もちろん作品の構造、現象は被験者に固有の意味をもつので、言語的注釈や inquiry を必須とする。この場合は、ほぼ一般の投影法による診断の場合と同様である。作品が全く自由な芸術作品のようになることまで許容しうる。

ここで用いた教示、場、枠組およびカードは次のとおりである（テストP₇）図式投影のダイナミックスを分りやすくするため一連教示を数単位に分け、それぞれについて1ケースの結果および統計結果を逐次記していくことにする。

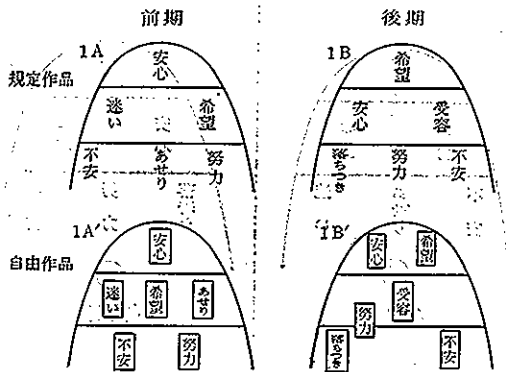
〔研究Ⅱ-1〕 母親の子どもに対する気持ち

教示の1段として、図Ⅱ-1のような台紙の一番上の欄上にA群の12カード（表Ⅱ-1）の中から、子どもに対して「いま、当面強く抱いている気持ちに最もあてはまるものを1枚、1番上の欄に置く」ように指示、次の

で「2番目にあてはまるもの2枚を2番目の欄に置く」よう指示（規定作品）。さらに3番目の欄に「常日頃抱いている気持ち」に関するカードを置くように指示している。（この第3位は枚数を自由とし、本報告では参考までにケース研究的に記すに止める。）次に「全体をよく眺めてあなたのお子さんに対する気持ちを表わしているかどうかを確かめて下さい。同じ欄の中でカードをびったりするように動かしたり、別の欄に動かしたり、カードをとりかえても結構ですから、できるだけびったりする作品に直して下さい」と指示（自由作品）。この自由作品について話しながら会話と気持ちの流れに応じて作品を作りかえ、必要に応じて白紙カードで自由な語をかき入れて用いていけば、図式投影法によるカウンセリングになる（付論Ⅱ）。

以上の第1段階についてケースAの母親の作品を図Ⅱ

図Ⅱ-1 ケースAのカード投影結果（P₇-1）



表Ⅱ-1 図式投影カード

A群					B群					
安	希	受	自	落	努	父	の	近	遊	遊
心	望	容	信	着	力	親	き	所	び	び
				き		の	よう	の	場	友
						協	だ	理	所	達
						力	和	解		
不	諦	迷	あ	混	不	入	制	専	や	障
安	め	い	せ	乱	満	園	度	門	仲	害
						の	の	間	児	
						入	充	指	の	施
						実	導	協	設	
									会	
C群										
快	交	安	積	表						
	わり	心	極	情						
				豊						
不	孤	不	消	無						
快	立	安	極	表						
				情						

一1に示す。規定作品をみると、前期すでに親自身が相談室で積極的になり、かつ子どもにもことばができたために「安心」と将来への「希望」ができたが、その反面子どもに対してのこれからの接し方について「迷い」があると母親Aは述べている。3段目前期のカードについては、「不安」「あせり」の中で「努力」をしなくてはならないのだということが強調されていた。全体的に子どもが良い状態へ進んでいくことの喜びと戸惑いが母親自身に感じとられていたようである（図Ⅱ-1-1A）。

前期に比べ、後期の作品は、negativeカードが3段目に1枚のみとなり、子どもへ対しての母親の気持ちがpositive化している。「迷い」「あせり」がなくなり、「受容」「落着き」があらわれていることは、必ずしも文字通りの受容とはいえず、かなりタテマエ的なものとスタッフには解されているが、こうした点は図式のみからは何とも言えない（図Ⅱ-1-1B）。

ついでカードの数と構造を自由化した自由作品は、1A'、1B'のようで、1A'は規定作品とはあまり変わらず「あせり」の強さを物語る程度であるが、後期ではかなり自由な配置によって現象のニュアンスを描き出している。規定作品が操作的心理測定に適しているのに対して、自由作品は以上のように、位置や余白のニュアンスから、一種の芸術作品のように、イメージを暗示する特徴があり、したがって一般の投影法の印象分析と同じように了解していくこと、それが被験者自身の体験的洞察にもつながることが期待される。

〔研究Ⅱ-1統〕同上カード式投影の統計結果

以上のP₇前段までの結果のうち、自由作品は統計がかなり複雑になるので、ここではとりあえず規定作品の1位、2位カードについての統計結果のみを示す。我々が従来用いてきたピラミッド式カード投影結果整理の原則に基づき、まず1位カードに2点を与え、2位を1点とした場合のカード得点は、表Ⅱ-2のようであった。全般的にみて、統計の一貫性はなく、ただ文教大相談室の56年度において「希望」「落着き」「自信」の低下、「あきらめ」「不満」「迷い」「あせり」「混乱」の増大というnegativeな変化が目立っている（ただし不安は減少し努力は増大）。相談室スタッフの検討結果では、とくにこの年度において、現実と直面している母親の苦しみも顕著だったようである。これは後述の他のテスト結果にもあらわれている。

注) なお、全カードをpositive-negativeに2分類した場合のpositive得点の前後変化は表Ⅱ-2と同じく56年度文教大学相談室においてnegativeな変化が強調されており、他は「変化なし」が多い。ひとつには

表Ⅱ-2 A群カード得点表

	55年度		56年度		センター	
	前期	後期	前期	後期	前	後
安心	2	6	10	12	3	2
不安	14	14	46	28	7	6
希望	23	17	50	32	15	17
諦め	1	1	2	10	1	0
不満	0	1	0	6	2	3
受容	11	20	42	40	5	3
迷い	7	7	8	20	4	0
自信	0	2	12	2	1	5
あせり	10	8	10	18	2	2
落着き	11	8	32	26	5	4
混乱	3	2	6	12	0	3
努力	18	14	30	44	9	6

(表Ⅱ-2でもそうであるが) 前期にかなりタテマエ的に positive なおき方をしていたことも影響したようである。さらにカードの構造を測定することがひとつのポイントであり、本研究においても positive-negative を基準として P/PP, P/NP, P/NN, N/PP, N/NP, N/NN の6類型に分けて前後変化をみたが各年度、各相談室を通しての一貫した傾向はみられていない。

〔研究Ⅱ-2〕 子どもに対面した時の図式 (P_T-2)

研究Ⅱ-1の第1段階教示に続いて第2段の教示に入る。図Ⅱ-2のような台紙を⊙(子の実名を記してある)の方を手前にして置き、子どもの母親に対する気持ちとして一番びったりするものを(表Ⅱ-1 C群カードの中から)1枚、一番上の欄に置き、その他、あてはまるものを2番目の欄に置くように指示。(枚数制限なし)。次に台紙を逆転させ⊙の方の側に、第1段階作品どおりにカードを並べ、気持ちにびったりするように並べ変えさせる(以上規定作品)。その後、カードの位置と枚数をすべて自由にし、ニュアンスをもたせた自由作品を作らせる

前述の事例Aの規定作品は図Ⅱ-2のように作品化された。子どもの認知に若干の変化があらわれていたのは生活場面での子どもの変化に対応していたようであり、それは相談室 play 場面での変化にも対応しているようであった。また子どもに相対していない場合の作品(先の図Ⅱ-1-1 A, 1 B)に比べると、前期において1 Aの迷いが努力におきかえられたのみである。なお自由作品は、このケースAでは規定作品とほぼ同じなので省略する。

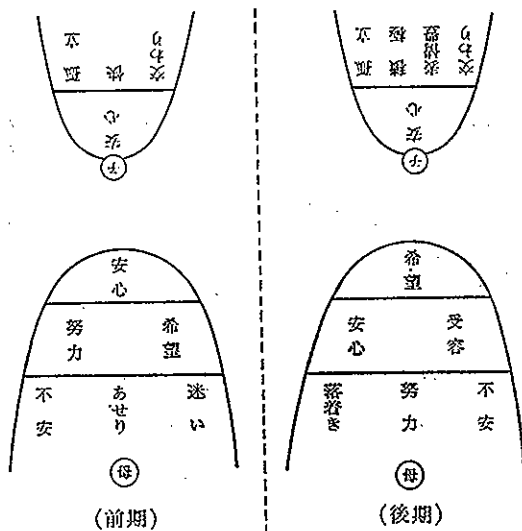
〔研究Ⅱ-2 続〕

以上の第2段階教示のうち、子どもの状態についての統

計結果は第1位カードのみについて前後期比較を行なったが、カード別頻数にも、positive 得点にも、有意な変化はみられていない。これに対する母親の気持ちは研究Ⅱ-1の場合と同様、negative 化ないし不変の傾向にある。

なお、母親の認知図式として研究Ⅱ-1(第1段階)に自分の気持ちだけに目をあてた場合と、この第2段階のように子どもに相対した場合の差は、とくに見出されなかった。

図Ⅱ-2 母子対面カードによる投影図 (P_T-2)



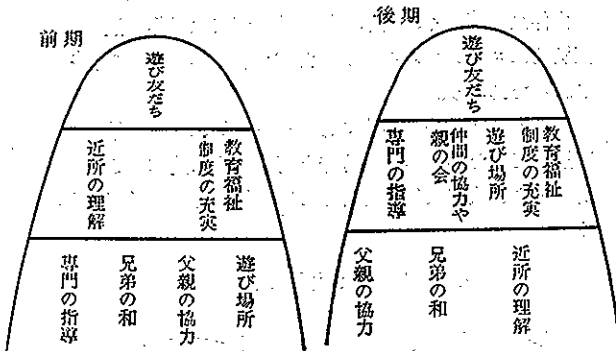
〔研究Ⅱ-3〕 ニードに関するカード投影

最後に第3段として別の台紙の上にB群のカードの中から、今最も必要としているものを1つ選んで、1番上の段におき2番目に必要なものを2段目に置くように指示。一番下の段には、一応満たされているもの、したがって必要ではあるが、背景にあるものを置かせた(第2・3段枚数制限なし)。

ケースAでは図Ⅱ-3のようになり、遊び友達の要求が、かなり具体的に考えられているようであった。統計的には1位カードの変数のみを表Ⅱ-3に示す。前後変化として、たとえば56年度文教大相談室のように、就園年齢に近づいたものにおいて後期に「入園、入学」が多くなっているというような傾向はみられるが、全体的に一貫性はなく、ケースの特殊事情が強く反映しているようであった。なおこのカードは、P₁チェックリスト(付論1)のニード項目に対応させて作成されているが、P₁P₃との相関関係などの詳しい吟味は、その他のテスト間相関吟味とともに別の機会にゆずる。

注) 研究Ⅱ全体を通してカード式投影法において、規定作品は操作的心理測定的な意味が強く、これに対して自由作品の方は、現象的ニュアンスの投影を許し、同時に心理療法的自己洞察の発展にも寄与することは前述した。しかしこのケースAでは、限定された時間内での測定としてテストが行われているので、治療的過程をよみとることはできない。これは次の研究Ⅲでも同様であり付論のケース研究ではじめて示される。

図Ⅱ-3



表Ⅱ-3 ニードに関する第1位カード(頻数)

項目	55年度		56年度		センター	
	前期	後期	前期	後期	前	後
父親の協力	3	2	5	2	2	3
きょうだいの和	2	1	0	2		
近所の理解	1	1	1	1		
遊びの場所	2	0	1	2		
遊び友だち	5	7	16	12	3	2
入園、入学	7	6	2	7	2	3
教育福祉制度の充実	2	1	1	2		
専門の指導	1	5	3	3	4	4
仲間の協力や親の会	0	1	2	0		
障害児施設	1	0	0	0	2	1
計	24	24	31	31	13	13

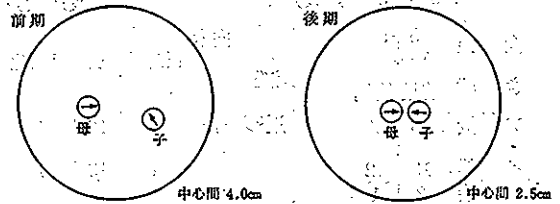
〔研究Ⅲ〕 単純図式投影法による研究

単純図式投影法とは、文字カードを用いず、円形駒と針金を使用して、自己像、二者関係像、集団関係像などを作成するものである。このうち図Ⅲ-1Bに例示したような自己像図式は、母子関係に適用する場合には「子ども」を紙面上方に記し、子どもに対する自己像を駒(自己の核)と針金棒(自己の棒)の位置や開き具合などによって表現するものである。本研究では、若干のケースにおいて試験的に用いられているにすぎないので省略す

る。ここでは母子関係像、及び家族関係に関するケース及び統計結果のみを記す。(研究Ⅲ-1) 母子関係単純図式(Ps)は直径15cmの円の中に直径2cmの母子の駒(それぞれ矢印で方向を示してある)を置き、その位置と向きによって母子関係を表現させた。

前述したケースAでは、図Ⅲ-1のように作品化された。前期の段階では、子どもの状態が良い方向へ進みはじめている安心感があるものの、戸惑いなどのため、母は正面から子どもの方を向けなかったようである。子どもも前期はハス向きである。カード式投影(図Ⅱ-2)では表現されなかったニュアンスがあらわれていたようである。後期には双方の側から、向き距離ともに近づいているが、多少概念的に理想化して認知しているのではないかという点も疑われる(一般に図式的投影法においてそのときの気分による典型が表現されやすいことは過去の研究でもみられている)。

図Ⅲ-1 母子関係単純図式(略図)



〔研究Ⅲ-1 統〕

親子関係図式投影結果の統計は、文教大相談室の55年度25例と56年度31例を加えた56例について行なわれた。統計にあたり、まず親子の向きを以下のパターンに分類した。

- ①互いにはほぼ正面(ズレ10度以内)で向き合っている
- ②互いに横に並んでいる(重なっているものも含む)
- ③互いに斜め内側を向いている(一方が正面のものを含む)
- ④互いに斜め外側を向いている
- ⑤一方が正面または内側、他方が側面又は外側を向いている

注) ①は②よりも角度は開いているが実際には並んでいる親密さのニュアンスをもつと解される。一方、距離については、駒の直径が2cmなので、中心間の距離0cmが重なっている場合、2cmが接している場合となるが、2cm以下の接し重なり型がかなり多い。

ま上記接し重なり型と離れている型に分け、上記向きのパターンと組み合わせた結果は表Ⅲ-1のようである。

前記に比べて後期は接し重なる傾向が増し、向きも正対の方向に若干変化しているようである。なお距離と向きの関係では、一般に「ア、イ」においては接し重なり型が多く、「ウ」「エ、オ」では遠い距離のものが多い。

最後に前後変化を距離（1cm単位でより近づいたか遠ざかったか）、向き（パターンとしてより正対したか背面化したか）によってみたものが、表Ⅲ-2であり、向きのパターンとしては過半数が変化していないが、後期の方が距離が近づき、かつ若干正対化していることが示された。

注) 前述カード式投影における56年度の negative 化傾向にもかかわらずこの単純図式の結果では55, 56年度の傾向に一般的な差はない。ただ表Ⅲ-1のア・イの距離が55年度では明確に接する方向に変化しているのに対して56年度では前後期の差がみられていない。

表Ⅲ-2 駒の前後変化 (56年+56年頻数) 表Ⅲ-1 駒の向きと距離の前後比較表

向き	距離	55+56年度	
		前期	後期
ア・イ	接	16	26
ウ	接	2	1
エ・オ	接	13	10
	接	2	1
	離	10	6
計		56	56

距離	向き		
	正対化	±	背面化
近づいた	7	16	1
±	1	13	1
遠ざかった	3	11	3

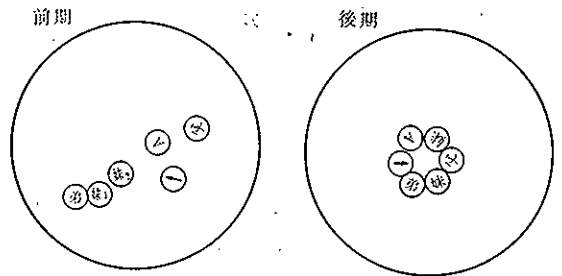
がされて作品になったものと思われる。

〔研究Ⅲ-2 続〕

家族関係図式の統計は、文教大相談室の56年度31例についてのみ行なわれた。家族図式の評定は①距離のみによる家族のまとまりの度合いの判定（松尾、草田、文教大科研報告による）②向きのみによる同上判定、③距離、向きの総合判定を用いた。結果は向きのみによる判定において、前後変化がよくまとまりの方向を示したものが21/31と、最大値を示したが、臨床的印象との一致は、総合判定の方が大なようであった。またカード式投影法の自由作品と同じく、簡単な統計的整理では限界に達し、個別的にニュアンスを生かした総合判定が、今後必要とされるであろう。

以上各種図式的投影法によるケース例示と統計結果を略述してきたが、詳しい吟味と考察は次に述べる2つの研究および次回報告分を含めて総合的に行なう予定である。

図Ⅲ-2 家族関係図式(略図)



付論 1 質問紙、評定尺度による吟味

(研究Ⅲ-2 家族関係図式投影, P.) : 家族をあらわす直径20cmの円を記した図版上に、家族全員(父, 兄...)を記した直径2cmの円形駒を配置させる。当該児は④で記し母親本人は①で示す。ふだん家族がそろっている時の物理的位置関係を作成した後、心理的關係、理想像を作らせる方法が最も一般的であるが、本研究では心理的關係像のみを用いた。

前述のケースAでは図Ⅲ-2のように作品化がなされた。前記に比べ後期に家族関係が安定してきたことは客観的にも確からしい。前期には、母親は他の兄弟も多いため、Aばかりをみていることができなかったが、後期にはAの状態が安定してきて、家族全員がまとまってきたといっている。後期のこのような典型的な「まとまり型」の図は、改善直後によくみられるものであり、たぶん現実の一人一人の關係よりはまとまりそのものの認知

研究Iとして位置づけた質問紙、評定尺度による研究は予備研究からの継続としては、前報に述べた子どもの行動評定研究と同様、全体研究の中心的な位置をしめている。またここで用いた評定尺度やその整理方法も、ほとんどが予備研究での検討を経たものである。しかし本報告が、図式的投影法を中心としたので、この研究Iを独立にここに付論として簡単に述べる。図式投影結果との相関を含め、詳細は次報において子どもの変化の分析と合わせて報告する予定である。

(研究I-1) 親のニードと悩みの変化(P, 治療者の評定による)

予備研究によって吟味された表1のチェックリストを用い、家庭生活センターのケース(2年間13例)のみについて、親担当の治療者が前、後期に評定した。項目別整理(付表1)のほか、次の理論カテゴリー、因子型の

得点の変化に着眼した。

①理論型は、P₁ チェックリスト作製にあたっての理論的視点からのカテゴリであり、P₁ の構造そのものによって示される。すなわちA～Gについて①が「悩み」をあらわし②+③が「狭義のニード」をあらわす。したがってA_①、A_②、B_①、B_②、C_①、C_{②③}……F_①、F_{②③}、G_②が理論カテゴリとなる（G_①は用いなかった）。各理論カテゴリの個人別得点は、「該当項目数/カテゴリ全項目数」とした。

②因子型は、第15集（54年度報告）で得られた13の因子のうち、前後変化を顕著に示す項目がすべて第1、3、7因子に属していたので、この3因子を重視し、それに因子の性格を考慮して第1、2、3、5、7の5因子を採用した。

理論カテゴリ得点は、前後期別に、付表1にも示されている。さらに理論型、因子型双方において、悩み、ニードが後期に（前期と比較して）増大したか減少したかを頻数で示したものが、表IV-1であり、P₁ の総括的結果である。全体として該当項目が少ないため、「不変」が多数を占め、前後変化は有意性をもっては確認しがたい。ただ子どもに関する悩み（A₁+B₁）の減少は第2因子得点の減少とも一貫してみられる。近隣社会との関係の悩みの減少（D）は第5因子では裏づけられていない。全体的に悩みの減少傾向は認められるようである。

（研究I-2）親のニードと悩みの変化（P₃、親評定による）

親自身による悩みとニードの評定スケールは、54年度報告および付表2に記したが、基本的には前記P₁の諸項目をできるだけ網羅するように作られ、これに加えて子どもへの感情に関する項目がつけ加えられている。理論カテゴリの吟味はP₁との相関吟味加わるので次年度にまわし、ここでは相関分析にもとづいたカテゴリ結果を用いる。文教大相談室55年度の結果をもとに一定の基準での相関の高い項目をグルーピングし、表IV-2のA～Eの5つのカテゴリを設定した。このグルーピングの結果自体が、P₁のカテゴリとの違いを示す。すなわちP₁における（治療者の認知に準拠した）カテゴリが理論的客観的であるのに対して、親によるカテゴリは、子どもとの具体的関係、子どもとの具体的状況に関する感情・態度により依存することが示唆されている。

表IV-2はA～Eの各カテゴリの個人得点が治療前後においてどのように変化したかを、表IV-1と同じ方法でとらえたものである。家庭生活センターにおいてC

表IV-1 P₁カテゴリ別得点の変化

理論型	悩み・ニードの			
	増大	不変	減少	
A ₁ 子どもの現実状況の把握・理解の悩み	5	5	3	
A ₂ 同上 ニード	4	4	5	
B ₁ 子どもに対する接し方の悩み	4	8	1	
B ₂ 同上 ニード	1	10	2	
C ₁ 家族関係の悩み	2	8	3	
C _{2,3} 同上 ニード	1	12	0	
D ₁ 近隣社会との関係の悩み	7	4	2	
D _{2,3} 同上 ニード	4	7	2	
E ₁ 医療機関・その他通所機関との関係の悩み	3	10	0	
E _{2,3} 同上 ニード	3	10	0	
F ₁ 教育制度・福祉制度についての悩み	4	4	5	
F _{2,3} 同上 ニード	5	5	3	
G ₂ その他のニード	1	9	3	
因子型				
第1因子	診断指導上の現実的ニード	5	6	2
2	子どもの遊びについての悩み	6	6	1
3	就園前後の不安	2	8	3
5	遊び環境と友人関係	5	4	4
7	子どもの状態を知りたい	5	5	3

表IV-2 P₃(親のニードと悩み)カテゴリ別変化

カテゴリ	文教大相談室						家庭生活センター		
	55年度			56年度					
	増	不変	減	増	不変	減	増	不変	減
A. 子どもへのかかり方の悩み	13	1	11	13	5	13	5	1	6
B. 子どもへのnegativeな感情(状態を知りたいニードも含む)	9	11	5	16	5	10	5	1	6
C. 子ども自身の状態についての悩み	9	4	12	11	4	16	3	2	7
D. 幼稚園・保育所に関する悩みとニード	7	11	17	10	8	13	3	3	6
E. 子どもへのpositiveな感情・態度	15	2	8	12	5	14	3	3	2

の「子ども自身の状態についての悩み」が、増加の傾向にありP₁の結果とはば一貫している。Dの「幼稚園、

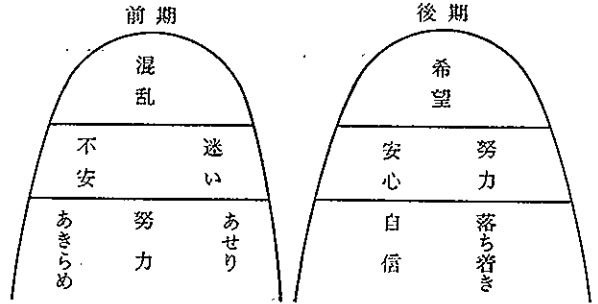
保育所(学校)に関する悩みとニード」については研究Ⅱ-3及びP₁の第3因子で明確な傾向がみられなかったが、ここでは予備研究の結果に反してむしろ減少傾向の結果にある。なお参考までに文教大相談室では、Dが増大しているが、一方P₇(研究Ⅱ)で問題になった、56年度のnegative化傾向は認められない。ケースごとに検討した場合、P₃とP₇でとらえられる悩み、ニードの値の違いに問題があるようであるが、詳細はテスト間相関を含めて今後の報告で検討の予定である。

付論 2 カード式図式投影を中心とした
ケース研究
—カウンセリング的過程を含む—

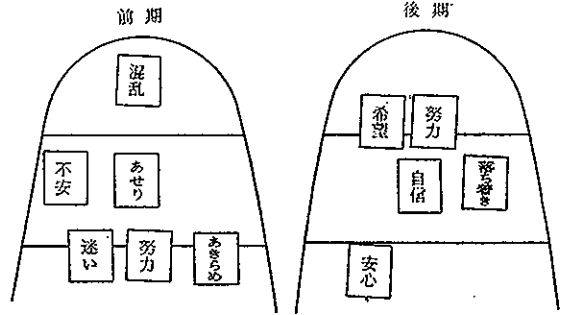
本論において図式的投影法による統計研究とともに、1ケース(ケースA)の一連作品を吟味してきたが、さらに図式的現象的ニュアンス及び図式作成過程のカウンセリングの流れを含めたケース研究を紹介しておきたい。
〔ケースBの背景〕子どもが2歳になっても言葉が全くでないため家庭生活センターに来所(1歳時から保健所、病院で検査や指導を受けていた)。来所時の子どもは多動で、働きかけや制止に対しては奇声をあげて抵抗。着衣など母親の介助以外は拒絶。プレイ室でも母子分離困難であった。約3ヶ月個人遊戯治療によって若干、分離と安定を得て56年4月からは、man-to-manグループに入った(週2回)。以後(本研究前期にあたる)10月までは変化はむしろ少なかったが、後期3月までの間に言語理解が発達し、発語もみられ、奇声、かんしゃくが影をひそめ、話しかけに対して動作ではっきり反応を示すようになった。社会適応もスムーズになり、乗物の中で動き回る事もなくなり、親がてこずることが減っていった
こうした中で母親はグループカウンセリングを通じてかなり意識変化が進んでいった。自己のベースの強い、家事中心、しつけ中心のやり方を反省、子どもを受け入れ子どものベースに沿う方向に変えていこうとしていた。しかし父親が納得せず、母親を批判するのでけんかになること、その他周囲の人の目、子どもへの気持ちがつかめないこと、不安でへとへとに疲れることなどが訴えられていた。しかしとくに秋以降、母親の内省が進み子どもの変化に伴って父親も協力的になり、子どもに近づき、家庭全体のゆとりが増していった。“ママ”の発語に甘えや訴えなどの気持ちが表現されるようになると、交流感を持つて、かわいさが増していった。その後、迂余曲折があり、障害児としての事実を受け入れざるを得ない苦しみも経ながら着実に幼稚園の手続きなども行ない、反抗する子どもにも、むしろたくましさを感じる

ゆとりをもち、きびしく叱ることもでき「思いきり自然に接しられるようになった」と述べている。

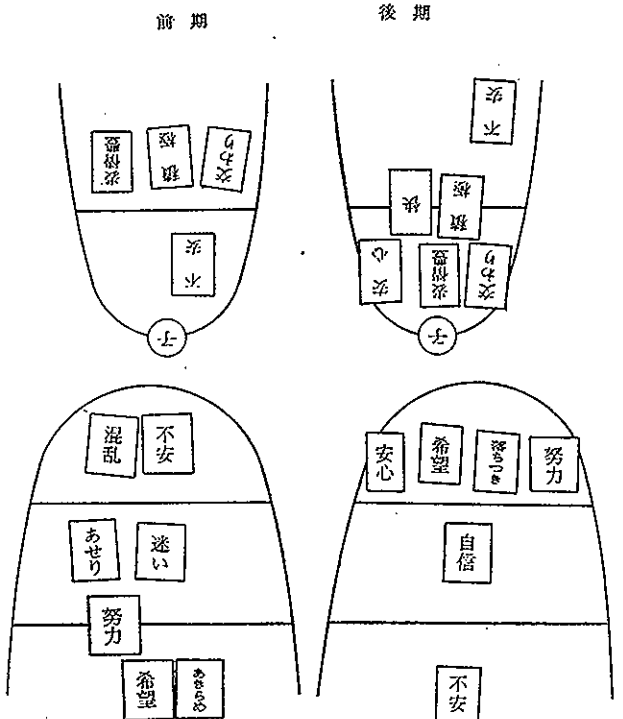
図V ケースBのカード式投影
V-1 (規定作品)



V-2 (自由作品)



V-4 (母子関係自由作品)



〔図式投影結果〕 ケース B の母親による図式投影結果は本論の統計上は、前後期にぶつうに行なわれたものを用いているが、この他に後期テストの約1ヶ月前、回想法により前後期4月、2月を比較作品化したものがあるので、それについて述べることにする。

研究Ⅱ-1のカード式図式投影結果は図V-1~4に一括して示す(図V-3にあたる対子ども規定作品は省略)。

前期は子どものことに関して母親自身が混乱して「これでいいのか」「どこかに通わせなくてはいけないのだろうか」「家の中にとじこめておく方がよいのだろうか」等の葛藤をあらわしており、他児と比べて仕方ないからあきらめようとも思っていたのである。なお前期の子どもの規定作品(省略した図V-3)は、自由作品(図V-4)と同じであり、子どもをよく把握できない自己の不安の投影として子ども側にも「不安」が強調されたようである。ただ子どもを前にした図V-4で「希望」が下段に登場していることは注目してよい。

後期においては「普通のレベルに達してくればいいなあ」という「希望」とそのためには心を穏やかに「努力」が必要で心の中にどーんと「落ち着き」「自信」を不動のものにしていきたいと述べられている。願望と現実が複雑に織りなされている。自由作品で「努力」が「希望」とともにトップになり「落ち着き」「自信」がより前面に感じられるようになったのは、作品化しているうちに自分の気持ちが改めて明確化されてきたためであるらしい。「安心」が前面に出ているものではなく、より根底のものとして感じるようになったことも「奥深くのもの」と改めて感じたためらしいが、しかし次に述べるV-4で再び最上段に変化するので、必ずしも一義的に解釈できるものとはいえない。

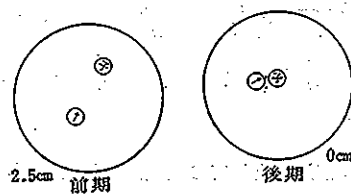
子どもに相対したときの図V-4では(子ども側については省略するとして)一直線に「安心」「希望」「落ち着き」「努力」のカードが置かれ、その4つのカードのうちひとつだけを強調すると一面的になってそぐわない。例えば「希望」だけだと「おしりをたたいているような感じ」があるという。「一直線でないと前進しない、あせらないで努力していきたい」と述べている。一方、子どもの根底の「不安」は、やはり自己の不安の投影を含んだものようであり、これを意識すると、自分の根底にも図V-2にはなかった「不安」が登場してきた。ただその「不安」のカードは「紙の上におくのではなくどこかにぶらさがっているみたいだ」と述べている。「前面にでてくるほどでもない。でもなにかしらいつも気になってつきまとっている」とも述べていた。

以上のようにこのP₁連の作品の流れはテストとして母親の前後変化を示すとともに、作品を作りながら、洞察も発展していくという後述のカウンセリング過程(流れ)をも示している。

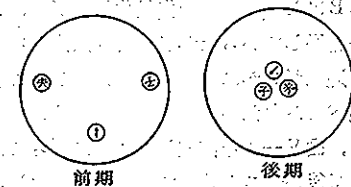
このほか細かな体験的ニュアンスは、母親の詳細な言語表現とともに多く汲み取り、図式的投影法の現象学的側面を示しているが、複雑になるので省略する。たとえば前期の自由作品において「努力」「迷い」「あきらめ」が線におかれていたことの意味について、母親は「努力してもどうやってことはない、がんばっただけでよくなるものではない」と述べ、「あきらめ」「迷い」「努力」の自分にとっての意味がきわめてデリケートだということを暗々裡に示す発言を多くしている。「迷い」は作品作成中に、土に出たり下に引っこんだりしていたがどちらにいてもダメで子どもが知恵遅れであることの「あきらめ」があるかぎり「迷い」は下におくことができないなど、他のカードとの微妙な位置関係で心境を表現していることも示されている。さらに中段とも下段とも決められない自分の中途半端さを自分の性格の問題として述べながら、一方では単純に物事をきめつけないでいろんなものを感じながらやっていきたいと述べ、図式表現の微妙なニュアンスを自己一致したものとしてうけとっている。

なお以上のニュアンスは親子関係単純図式や家族関係図式にもあらわれている(図V-5、6)。この双方については略述するとどめるが、前期については、子どもは自分だけの世界を作り、「母親の言うことは全く通じず、やりたい放題で歩こうともせず」……と述べている。母親は子どもの方を向いて一生懸命追いかけているのだが、子どもの方は、母親を全く無視して母親の存在

図V-5 母子関係単純図式



図V-6 家族関係図式

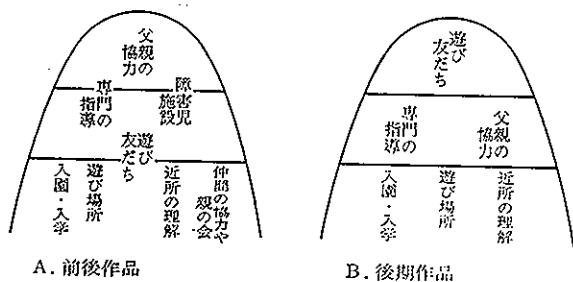


すら認めてもらえないようであった。家族図式(図V-6)でのボタンは若干異なるが「自分はふらふらしていたし、夫とは子どものことでけんかをするし、夫は他児と比較したり、子どもといるのを嫌がっていた。3人で出かけることはなかった」と家族全体のまとまりのなさを強調し、どうしてよいかわからない状態だったと述べている。それが後期においては、図V-5、6とも母は子どもの方に目がむいている(ことばが出はじめてから父親も安心したようである)。いずれの図でも母親自身の安定感が述べられているが、家族図において子どもに正対しているのに比して親子関係図では逆に「ゆとりができて少し他の面に目が向くようになった」とのべ、少し斜めにむいていることは興味深い。図の単純な統計処理によってはとらえられない微妙なニュアンスが表現されているといえよう。

なおP-3(研究II-3)の作品については、紙数の関係で作品(図V-7)を示すにとどめる。ケースの前文からしてほぼ了解できるものである。規定作品教示にもかかわらず線上にカードを置いてあることなどは、自由作品化に慣れた被験者によくみられることである。

これらの結果はまた、質問紙、チェックリスト(P₁, P₂)の結果ともほぼ対応しており操作的測定(とくに要素的測定)におけるチェックリストの長所に対して、図式投影自由作品が現象的のニュアンスを表現しやすいことが本ケースにおいても裏書きされたとの印象を、われわれは得ている。

図V-7



A. 前期作品

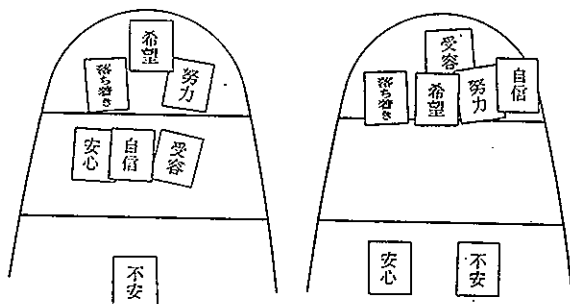
B. 後期作品

〔治療的洞察過程としての補足〕 図式的投影法の治療的側面は、本報告では、中心テーマになっていないが、前述した過程にも含まれており、やはり重要な柱なのでこのケースBにおいて図式を作品化しながら、いかに母親の洞察が発展していったか(つまり図式を用いたカウンセリング過程がいかに発展したか)のひとこまを、ごく簡単に述べておきたい。

図V-2、図V-4を作成したことによって母親は、前期に比して後期テスト時までの自分が変化したこと

改めて気がついたと述べている。とくに親子関係にゆとりができ、落ち着いて安心して生活できるようになった自分(及び親子双方)の実感が高まったようである。図V-2と図V-4の差は、ただ子どもに相対した時の差というだけでなく、図V-2を話しながら図V-4の作成に移っていく数分の会話の中での変化の流れをも示していたようである。このことは図V-1~4のテスト時から約1ヶ月後に再度カウンセリング的図式投影を行った(図V-7)が比較的V-4に似ていることから裏付けられる。さらに母親自身テストをしている間に実際に自分にゆとりが感じられてきたと述べている。このように図V-1~V-4にかけてのテスト兼話し合いの過程自身、作品を注視し気持ちを確かめ言語化していくうちに気持ちが明確になって自分のものになり、それが作品を作り変えさせ、次への力になっていくという治療過程のひとつまだったとみなすことができる。もちろんそれはpositiveなものだけでなく、図V-4 Bにおいて子どもの不安に対応して自分の側の根底の不安をも自覚するという過程を含むものであった。

図V-8. 9 ケースB面接中の作品の変化



ちなみに約1ヶ月後にカウンセリング的に行なったセッションにおいて、初めは図V-4 Bに似た図V-8が作成された。ここで彼女は「希望」を最も強調しながらしかし「希望」だけに頼らず、子どもを受け入れていきたいことを強調している。さらに「落ち着き」が出てきたことが自分の一番の変化ではないかと述べ、それに伴って自信もでてきたということを語りながら実感していった。こうして約30分後(その間の変化は省略するとして)最終的に作り直した作品(図V-9)では、受容が最も強調され、自信と落ち着きが次に両端に強調されるというニュアンスになっている。こうした当面意識の変化に伴い図V-4 Bから引き継がれていた「不安」(期待の不安だという)にも変化が生じ、根底は「安心」と「不安」がバランスをとる形になったこと形になった。結果的に中央の欄がなくなったことには、とくに大きな意味はない。

注) なおこの母親においては作品全体のニュアンスが体験的に洞察と表裏をなしただけでなく、カードの言葉自体の影響もかなり強かったようである。もちろんそれが要索的概念的の教訓になったということではなく、カードの言葉(とくに「受容」)が認知的結実点となって全体的洞察を強めたという意味が推察される。これを境に

受容、落ちつき等の言葉が、全体の文脈の中になれてより豊かな自己表現になっていったことがカウンセラーに感じとられている。

(なお、この研究は共同研究者のほか、豊村恵子、大久保明子、菊池郁子、相田玲子、その他東京臨床心理研究会および文教大学人間科学部関係者の協力による。)

付表1 P₁全項目と前後変化(センター該当頻度及びケースB)

	2年分13例		ケースB	
	前期	後期	前期	後期
A 子どもの現実状況の把握・理解の問題				
① 発達の遅れ(ことばの遅れ)に対する不安	9	9		
子どもの行動の意味が理解できないいらいら	6	6		
(普通の子と違う)異常性に対するおそれ	3	4		
子どもの変化・成長をなかなか認められない焦り	8	8		
他児への羨望	3	3		
将来の不安	9	11		
A①計	6.3	7.3		
② a 子どもの発達状態について現状を知りたい				
子どもの気持や行動の意味が理解できないので知りたい	6	5		
診断してほしい、普通と違うのではないか	1	2		
子どもの発達の遅れ(ことばの遅れ)の原因を知りたい	3	4		
子どもの今後の発達の見通しが知りたい	2	5		
プレイルームでの子どもの様子が知りたい	3	0		
b 客観的資料(知能テスト・発達テスト)が欲しい				
プレイルームでの子どもが見たい	2	0		
A②計	2.6	2.75		

B 子どもに対する接し方の問題

① 子どもにどう接したらよいか分からない、混乱してしまう	5	4		
子どもの状態・行動に対するいらいら・腹立ち・怒り	7	8		○

	2年分13例		ケースB	
	前期	後期	前期	後期
子どもに適切に接することができない自分への嫌悪感	5	4		○
子どもを順調に育てられなかったのは自分の育て方のせいか	3	4		
状況として接する時間がとれない悩み	3	1		
B①計	4.6	4.2		
② この子に合った接し方を知りたい(自分の接し方でよいのだろうか)				
こういう場合の子どもへの対処の仕方を知りたい(具体的な問題行動、異常行動に関して)	4	5		○
6	7		○	
B②計	5	6		
C 家族関係の問題				
① 父親の非協力に悩む				
同胞との関係に悩む	4	4		
その他の家族関係に悩む(姑その他)	5	4		
C①計	4.66	4		
② a 家族の問題を処理するにはどうしたらよいか				
b 自分以外の家族に会って欲しい	0	0		
③ 家庭に来て解決して欲しい				
	0	0		
C②+③計	0.6	0.6		
D 近隣社会との関係の問題				
① 近所の人の無理解・好奇の目などに悩む				
近所の子とうまく遊べないので悩む	6	7		○
適当な遊び場所がなくて悩む	5	9		○
	2	4		

	2年分13例		ケースB	
	前後	後期	前期	後期
適当な遊び友だちがいなくて悩む	1	6		
子どもの障害について話し合える人がいなくて悩む	1	2		
D①計	3	5.6		
② 障害を理解してもらうためにはどうしたらよいか	1	0		
近所の子とうまく遊べるようにするにはどうしたらよいか	3	2		
適切な遊び場所がないがどうしたらよいか	0	0		
適当な遊び友達がいないがどうしたらよいか	0	3		
③ 地域の障害児を持つ仲間と連帯したい	0	1		
D②+③計	0.8	1.2		
E 医療機関・その他の通所機関との関係の問題				
① 受診するのがこわい	0	0		
医師不信、行っても仕方ない	0	0		
② 受診が必要だろうか	1	1		
どこへ行って診てもらえばよいか	0	0		
他の機関への通所について適切かどうか知りたい	1	3		
E①+②計	0.4	0.8		
③ 適切な医療機関を受診のために紹介して欲しい	0	1		
他の通所機関へ紹介して欲しい	0	2		
E③計	0	1.5		
F 教育・福祉制度についての問題				
① 教育制度に対する不満	2	1	○	
幼稚園・保育園への入園に対する不安	7	5	○	
その他の通園施設への入園に対する不安	2	2		
福祉金・愛の手帳などの受益に対する抵抗・不満	2	1		

	2年分13例		ケースB	
	前期	後期	前期	後期
園に対しての不満	2	2		
F①計	3	2.2		
② 園の選択についての意見を聞かせて欲しい	2	2		
教育制度に関して知りたい	2	0		
幼稚園・保育園の情報が知りたい	3	3		
その他の通園施設の情報が知りたい	0	2		
取容施設の情報が知りたい	1	2		
園と子どものことについてどう話し合ったらよいか	2	2		
福祉金・愛の手帳などの受益について知りたい	1	1		
③ 園へ紹介して欲しい	0	2		
園と子どものことについて話し合って欲しい	0	0		
その他の施設へ紹介して欲しい	1	0		
制度の改善へ向かって運動する	0	1		
F②+③計	1.09	1.36		
G その他				
① (マスコミの)情報に接してショックを受け不安になる	1	0		
② a 情報に接したがどういう意味かはっきりさせたい	0	0		
b 本を貸して欲しい(紹介して欲しい)	0	1		
発語を促す治療教育をして欲しい	2	0		
母親のカウンセリングを受けたい	0	0		
通所日数を増やして欲しい	1	0		
面接時間を適当な生活時間に合わせたい	0	1		
相談料の減額あるいは免除をして欲しい	0	0		
G②計	0.428	0.285		

付表 2 P₃と全項目と前後変化（センター平均及びケースB）

P ₃ 項 目	平 均 値		ケ-ス B 前:後	P ₃ 項 目	平 均 値		ケ-ス B 前:後
	前 期	後 期			前 期	後 期	
A [子どもへの感じ方の悩み]				F ₃ 33 幼稚園・保育所・学校への紹介などを相談所で援助して欲しい			
A ₁ 1 この子の気持ちや、行動の意味が理解できないいらだちを感じる	2.8	2.9	<	E [子どもへの positive な感情・態度]			
B ₁ 2 子どもに適切に接することができない自分への嫌悪感を覚える	3.6	3.7	>	× 12 子どもの変化、成長がみられるので嬉しい	3.9	4.4	=
A ₁ 3 子どもの変化、成長をなかなか認められないあせりを感じる	3.4	2.7	>	× 13 この子を育てるのは生きがいの一つであり、この子なしの生活は考えられない		3.9	>
B ₁ 4 自分の子どもへの接し方はこれでよいのか疑問に感じている	3.7	3.4	<	× 10 私はこの子が好きである	4.6	4.6	=
× 7 この子の欠点ばかり目についたり気になったりする	2.6	2.9	=	× 11 この子といるのは楽しい	4.2	4.4	=
D ₁ 26 近所の人の無理解・好奇の目に悩む	2.6	2.0	<	× 14 こういった子どもを持たなかったら、今ほど生きることの意味が感じられなかったと思う		3.9	<
D ₁ 27 近所の子どもとうまく遊べないので悩む	3.5	3.1	=	× 38 この子がいることによって、他のきょうだいに良い影響を与えていると思う			<
B [子どもへの negative な感情]				そ の 他			
× 5 この子さえいなければと思うことがある	1.8	2.2	>	9 この子と気持ちのつながりを持っていてと感じられる	4.1	3.7	
B ₁ 6 自分の子どもでも惱ましいと思うことがある	2.3	2.5	=	18 子どもの気持ちや行動が理解できないので教えて欲しい	3.2	3.0	
× 8 この子がいるのでわずらわしく感じることもある	2.1	2.1	>	23 この子にあった接し方を知りたい	2.5	2.0	
B ₁ 21 子どもの状態・行動に対するいらだち、腹だち・怒り	3.0	2.4	=	24 父親の非協力に悩む	2.5	2.0	
C 「子ども自身の状態についての悩み」				25 きょうだいと本児との関係に悩む			
A ₁ 15 子どもの発達の違いに対しての心配	4.4	4.1	=	28 教育・福祉制度を充実して欲しい	4.2	3.1	
A ₁ 16 子どもの将来の不安	4.2	4.5	>	29 教育制度に対する不満	3.7	3.4	
A ₂ 19 子どもの発達の遅れの原因を知りたい	4.1	3.4	=	34 この子のことが、いつも夫婦げんかの種になる	2.6	2.2	
A ₂ 20 子どもの今後の見通しが知りたい	4.6	4.1	>	35 この子が夫婦のかすがいになっている			
A ₂ 17 子どもの発達状態について現状をしりたい	4.1	3.0	<	36 この子に手がかかって、夫の世話が行きとどかないことを悪いと思っている		3.6	
B ₁ 22 子どもを順調に育てられなかったのは自分の育て方のせいかと悩む	3.6	3.9	<	37 この子に手がかかって、他のきょうだいの面倒が見られず申し訳ないと思う	3.1	2.9	
D [幼稚園・保育所・学校に関する悩みとユ-ド]				39 祖父母への気がねをしている			
F ₁ 30 幼稚園・保育所・学校への入園、入学に対する不安	4.1	4.2	=	40 祖父母の協力によって助けられていると思う	2.4	2.7	
F ₁ 31 幼稚園・保育所・学校の選択について悩む	3.9	3.5	<	41 その他気になっていることがありましたらお書き下さい	3.5	3.2	
F ₂ 32 幼稚園・保育所・学校の情報が知りたい	3.6	4.1	<				